

障害児が幸せな生活を送るためには、周囲の人々の理解ある接し方が大切な条件になります。近年、思いやりを育てる教育が学校や幼稚園、保育所などで積極的に取り組まれるようになってきました。

一. 行動として

発現する思いやり

思いやりとは、

① 障害児の立場に自分をおいて、周囲から与えられている不当な言動を自分が受けているかのように感じ（共感的理解）、

② 自分が幸せになりたいと願っているように、障害児も同じ気持ちであることとらえ（いのちの対等）、

③ 障害児の幸せのために行動に表わす、ことです。

しかし、実際的には、子どもになるほど相手の心情を理解しないで自分中心に行動するので、世話のやき過ぎになり、相手から嫌われる傾向がありますし、他方、大人になると、思いやりを知的レベルではよく理解できるようになります。行動に移すことにはためらいが生じ、何もしないで終るようになってしまいます。いくら理解していても、障害児が困っているときに援助できないのであれば、知らないのと同じであり、全く意味がないと言わざるを得ません。

障害児教育雑記帳

障害児への思いやりを育てる教育

学校教育学部
障害児教育教室

田口則良

二. 親和的雰囲気作り

果たして、障害児の立場に立った行動にまで高められた思いやりは、どのような教育によって育つものでしょうか。

障害児や友だちに思いやりを持たせるためには、先ず、当の本人が友だちや教師から思いやりを持たれていると感じ、所属集団に満足感をいだいていることが前提になります。このような自己意識は、お互いに相手のよい所を認め合う学級の雰囲気の中でもっともよく形成されるといわれます。

そのために、小学校低学年では「よいことみつけ」、中・高学年では「一分間スピーチ」、中学校ではホームルームでの話し合いの時間帯などに友だちのよい行いを発表し合い、認め合う機会を多く作る仕方が取り入れられています。その際、悪い行いはできるだけ取り上げないで、よい行いを中心に話し合います。

よい行いとは、友だちと比較したものではありません、本児にとってのよい行いですから、どの子どもにもその子なりに認められることとなります。

三. 福祉教材を通して

小・中学校では、障害児の人数が健常児に比べて少ないことから、直接触れ合える時間帯を作ることには限界があります。そこで、福祉教材により学習する方法がとられることとなります。

その中心になる教材が、障害児と健常児との触れ合いが主題になる読み物です。一般に学校教育では、正・誤あるいは善・悪で二分割して判断する授業が行われています。読み物学習では、登場人物の考え方や行動についての自分の思いを素直にさらけ出すことが求められますので、教師は価値的な評価は一切しません。いつもの学習のスタイルと違いますので、当座は子どもたちにはとまどいが多く、慣れるまでには多少時間を要します。

子どもたちは、お互いに異なる多様な考え方を持っており、自分の考え方が出つくすまで待ち、自分の考え方の違いを明確にさせ、自己反省を促します。教師は心的活動を活性化する役割であり、決して方向づけはしないことが肝要です。

四. 直接のかかわり合いを通して

いくら思いやりの心情が育っていても、直接障害児と接した経験がなければとっさに接する勇気がわかず、行動として表現できないまままで終わってしまいます。

そこで、障害児と健常児との混成集団を作って学習させる、いわゆる交流学習が必要になってきます。実際の活動では、ときとして周囲の子どもたちに差別的言動が生じる場合がありますが、即刻、毅然たる態度で、それが障害児にとってどんなに悲しいことか共感的理解を通して反省させます。

障害児と共同で活動する機会を作りさえすれば、思いやりは自然に育つという考え方がありますが、それは十分でなく、正しい接し方を適宜、機会をとらえて指導することが大切です。

プロフィール

- （たぐち・のりよし）
- ◇ 小学校教職歴七年間
- ◇ 国立特殊教育総合研究所を経て 本学部へ
- ◇ 平成七年三月で定年退官
- ◇ 専攻は、精神遅滞児の教育

